

小規模校の児童の他者と関わる力を育てる研究（第一年次）

—実態調査と教育相談の手法を生かした実践を通して—

長期研究員 小松 光恵

《研究の要旨》

小規模小学校においては、児童同士の関係性が固定化されやすく、社会性やコミュニケーション能力等が育ちにくいといわれている。これらの課題の解決を図るためには、小規模小学校のよさを生かして、児童の他者と関わる力を育てていく必要がある。そこで本研究では、実態調査と教育相談の手法を生かした授業や日常指導等の工夫を通して、小規模小学校の児童の他者と関わる力を育てることをめざした。

I 研究の趣旨

学校教育法施行規則では小学校の標準学級数を12～18学級と定めているが、平成27年度現在、全国の小学校のおよそ半数がそれを下回っている。本県でも小学校467校中、標準学級数を下回る小規模小学校（以下、小規模校）は295校と全体の6割以上を占めており、そのうち統合の検討を要する1学年1学級以下の学校も4割に達している。これらの小規模校においては、児童同士の深い人間関係が築かれやすい一方、社会性やコミュニケーション能力等が育ちにくいといわれている。

小規模校に勤務した際の自分の指導を振り返ると、小規模校のよさや課題のとらえが曖昧で、身に付けさせたい力を明確にした支援ができなかったために、児童のコミュニケーション能力等を十分に向上させることができなかった。これらのことから、小規模校のよさを生かして、児童が他者とよりよい関係を築いていけるようになるための手だてを講じる必要があると考えた。

そこで、小規模校のよさを把握するために実態調査を行い、そのよさと教育相談の手法を生かした実践を通して、小規模校の児童の他者と関わる力を育てたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

実態調査を通して小規模校のよさを把握し、そのよさと教育相談の手法を生かした実践を意図的・計画的に行えば、児童に他者と関わる力を身に付けさせることができるであろう。

2 研究の内容と実際

(1) 小規模校の実態調査

小規模校6校（調査協力校：3学級2校、4学級1校、5学級1校、9学級1校、研究協力校：3学級1校）に勤務する教職員48名と在籍する児童315名を対象に、自校のよさ、児童のよさに関する調査を4件法と自由回答法により行った。なお、児童に対する自校のよさに関する調査は、自由回答法のみとした。

る調査は、自由回答法のみとした。

「自校のよさに関する調査」（図1）の結果、教職員は「児童同士の異年齢交流をつくらることができる」「個に応じたきめ細かな指導を行うことができる」「家庭との連携を図ることができる」「一人一人の個性を伸ばすことができる」という設問への回答の平均値が他の項目に比べて高かった。また、児童は「全校生の仲がよい」「授業を分かりやすく教えてもらえる」等と記述しており、教職員がよさと感じていることと児童がよさと感じていることは重なる傾向が見られた。

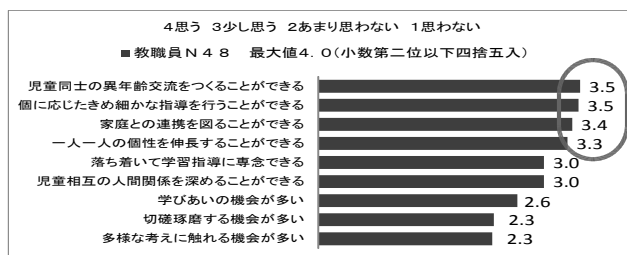


図1 自校のよさに関する調査（教職員）

「児童のよさに関する調査」（図2）の結果、教職員は「友達の長所や短所を知っている」「相手の気持ちを考えながら話を聞くことができる」についての平均値が高く、児童は「友達の輪の中に入ったり、友達を誘ったりできる」「友達とのトラブルを話し合って解決することができる」「相手の気持ちを考えながら話を聞くことができる」「相手の気持ちを考えながら話をすることができる」等についての平均値が高かった。

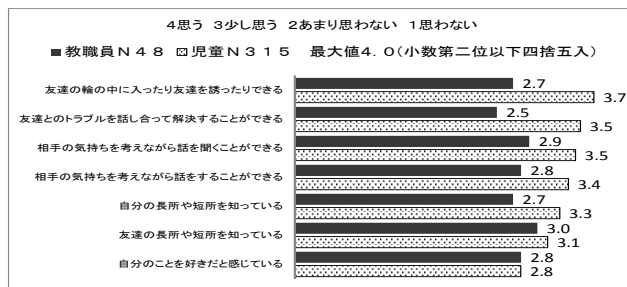


図2 児童のよさに関する調査（教職員・児童）

これらの結果は、調査した学校によって若干の違いはあるものの、おおむね共通していたため、研究協力校で効果が見られる取組は他の小規模校においても有益であるこ

とが推察された。

(2) 他者と関わる力の焦点化

文部科学省は、小規模校で不足しがちな社会性を涵養する機会や多様な意見に触れる機会、切磋琢磨する機会をつくるためには、異学年集団での計画的な体験学習等、意図的な取組を積極的に行う必要があるとしている。また齋藤誠一は、人間関係能力を育成するためには「はたらきかけること」「認め合うこと」が有効だとしている。これらのことと、実態調査の結果から、本研究では自己理解や他者理解の深化等、これまでの関係性をとらえ直す「自他の見方を広げる」取組と、コミュニケーションスキルや他者と関わろうとする意欲の向上等、これまでの関係を広げる「自他にはたらきかける」取組に焦点化して、他者と関わる力を育てることとした。

(3) 小規模校のよさと教育相談の手法を生かした実践

研究協力校の全学級（1学年2名，3・4学年4名，5・6学年7名）を対象に構成的グループエンカウンター（以下，SGE），ソーシャルスキルトレーニング（以下，SST），アサーショントレーニング（以下，AT），プロジェクトアドベンチャー（以下，PA）等の教育相談の手法を生かして、「自他の見方を広げる」取組、「自他にはたらきかける」取組に焦点化した授業や日常指導等を行った。その際、実態調査で把握した小規模校のよさを生かすために、以下のa～eに留意して実践した。

- a 教員が児童役になり、多様な意見を提示する。
- b 児童が困惑や矛盾を感じる場面を意図的に設定する。
- c 児童同士の肯定的な相互評価を取り入れる。
- d 児童が個性を生かして表現できる場を工夫する。
- e 他教職員や家庭との連携を図るために情報を発信する。

① 他者と関わる力を育てるための授業

道徳の時間において、「自他の見方を広げる」取組（各学級2時間）、「自他にはたらきかける」取組（各学級2時間）を担当とのティーム・ティーチングにより行った（図3，図4）。

ア 「自他の見方を広げる」について

学年	<資料名>	授業内容	留意点
1	<おしゃべりしましょう> SGEのエクササイズ「おしゃべり」を通して、自分のことを話したり、友達の話の聞いたりして、友だちへの理解を深めたり興味関心を高めたりすることができるようにさせる。		a, c, d, e
3・4	<つとむくんはやさしいんだよ> SGEのエクササイズ「ほめほめシャワー」を通して、友達の良いところを見付けることにより、友だちを肯定的に見ることができるようになる。		a, c, e
3・4	<自分の気持ち 友だちの気持ち> SSTを行う際に活用する表情カードを用いて表情や身振りから気持ちを想像させ、それが友達との関係づくりにつながることに気付かせる。		a, b, d, e
3・4	<こう言ってほしいな> SGEのエクササイズ「ほめあげ大会」を通して、友達の良いところを見付けたり、自分のよいところに気付かせたりして、自分や友達を肯定的に見ることができるようになる。		a, c, e
5・6	<いろいろな自分を伝え合う> SGEのエクササイズ「質問じゃんけん」を通して、友達の新しい一面に気付かせるとともに「他己紹介」を通して友達の新しい一面を共有させる。		a, c, d, e
5・6	<オトちゃんルール> SGEのエクササイズ「よいところ紹介」を通して、自分の長所に気付かせ、その長所をどのように伸ばしていくかを考えさせる。		a, c, e

図3 「自他の見方を広げる」取組

【授業実践例 3・4年くこう言ってほしいな】

本時では、自分や友達を肯定的に見ることで、固定化された関係性をとらえ直すきっかけにさせたいと考え、SGEのエクササイズ「ほめあげ大会」を通して、友達の良いところを見付けて伝える活動を行った。その際、小規模校のよさを生かし、実践者と学級担任が児童役となって活動に加わり、それぞれが違う視点で児童のよいところを伝えたり、児童同士の肯定的な相互評価の場を設けたりした。初めのうちは、よさを伝える児童も伝えてもらう児童も恥ずかしそうにしていたが、活動の中盤から「うれしい」と両手を頬に当てて、伝えてもらったうれしさを素直に表現する児童の姿が見られた。授業後の感想には、「友達とよいところを見付け合っとうれしかった」「初めて知ったこともあった。これからも見付けていきたい」等があり、自己や他者に対する見方が広がっていることがうかがえた。

イ 「自他にはたらきかける」について

学年	<資料名>	授業内容	留意点
1	<ふわふわことば ちくちくことば> SGEのエクササイズ「ふわふわ言葉とちくちく言葉」を通して、心の様子を視覚的にとらえながら考えさせることで、言った方も言われた方も、うれしい気持ちになったり悲しい気持ちになったりすることに気付かせる。		a, b, c, e
1	<こころをこめてありがとう> 日常生活では「ありがとう」を伝える機会がたくさんあることに気付かせるとともに、「ありがとう」を伝えたい時や言っただけの気持ちを話し合ったり、SSTを行ったりして、心を込めて「ありがとう」を伝えることができるようにさせる。		a, b, c, e
3・4	<勝手に決めないで> ATを通して、嫌だという気持ちの伝え方を考えさせたり、自分も相手も大切にしたい気持ちの伝え方に気付かせる。		a, b, c, e
3・4	<ささえ合い・助け合い ～「合い」の力で心と心をつなげよう～> PAのアクティビティ「新聞紙ゲーム」を通して、協力する体験をする中で喜びや達成感、悔しさ等を感じさせ、協力する時には友達と励まし合ったり、自分の考えを伝え合ったりすることが大切であることに気付かせる。		a, b, c, e
5・6	<こんなとき、どうする？> SSTを取り入れ、日常のトラブルの場面について、自分だったらどのように伝えるかを考えさせたり練習させたりして、自分の考えや自分らしさを生かして伝えることができるようにさせる。		a, b, c, d, e
5・6	<人間コピー機ゲーム> SGEのエクササイズ「人間コピー機ゲーム」を通して、みんなで協力する体験をさせ、互いにアドバイスをしたり、励ましの言葉をかけたりすることが大切であることに気付かせる。		a, b, c, e

図4 「自他にはたらきかける」取組

【授業実践例 5・6年くこんなとき、どうする？】

本時では、友達に嫌なことや悲しいこと等を言われた経験が少ない研究協力校の児童に、友達とのトラブルの場面においてどのように関わっていくかを考えさせるためにSSTを取り入れた活動を行った。その際、個性を生かして自分の考えを表現できる場を設けた。友達から「私の友達の〇〇さんと仲良くしないで」と言われる場面で、自分の思いをどのように伝えたらよいか戸惑いを感じていたA児が、友達から「Aさんの人なつっこいところを生かすといいよ」とアドバイスされたことで、「ぼくだって一緒に遊びたいよ」と自分の思いを伝えることができた。本時の取組を通して、自分らしさに気付かせ、それを生かして他者にはたらきかける児童の姿が見られた。

② 他者と関わる力を育てる日常指導と環境づくり

授業と並行して、日常指導と環境づくりを行い（図5）、計画的で継続的な指導をめざした。朝の読書タイムでは、自己理解や自己受容の深化につながる図書を選

定して読み聞かせを行った。他の教職員と協力して児童への読書指導を行ったことで、保護者から家庭でも子どもが借りてきた図書を一緒に読み、友達づくりについて話し合ったという話が聞かれた。業間の時間では、授業前段階のオリエンテーションのために、または授業の補充・深化のために、教育相談の手法を生かした活動や同規模校の友達の紹介、他学級の授業の紹介等、全11回の全校活動を計画的に行った。さらに、異年齢交流の場を計画的に設けたことで、上学年児童が下学年児童に優しく教えたり励ましたりする姿、下学年児童が上学年児童の話を素直に聞き入れて楽しんで活動する姿を見ることができた。

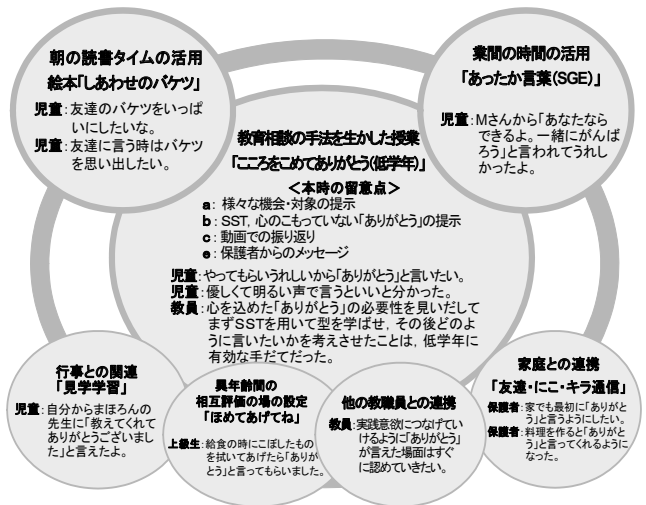


図5 授業と並行して行った日常指導・環境づくりの例(低学年)

III 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 他者と関わる力を育てるための実践の結果

① 事前調査と事後調査の比較

実践前後に研究協力校の児童を対象に紙面による事前、事後調査を行った。さらに、その回答の理由を把握するために聞き取り調査も行った。それらの調査を比較したところ、特に以下の3設問において変容が見られた(図6)。

ア「友達とのトラブルを話し合って解決することができる(設問5)」

日常生活の中で友達とのトラブル等を経験する児童は少ないにもかかわらず、平均値が3.5から4.0に変化した。これは、実践者と学級担任が授業や業間の時間等で一般的によく見られる児童同士のけんかや言い合いになる場面をいくつか選択して演じ、児童に困惑や矛盾を感じさせる体験を意図的にさせたことで、トラブルの場面における他者との関わり方を身に付けさせることができたためと推察される。

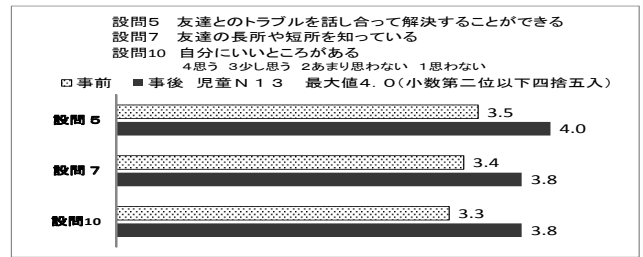
イ「友だちの長所や短所を知っている(設問7)」

平均値が3.4から3.8に変化した。これは、授業や業間

の時間等において、友達のよさを見付ける楽しさを感じさせたり、教師も児童の中に入って見方や考え方を広げようという意見を提示したりしたことで、他者理解が深まったためと考えられる。

ウ「自分にいいところがある(設問10)」

平均値が3.3から3.8に変化した。これは授業と業間の時間等において、学級または異年齢の児童同士の肯定的な相互評価の場を設けたり、他の教職員や保護者に児童への肯定的な評価を促したりしたことで、自己受容が深まったためと考えられる。



② 他校との交流における見取りから

実践後、同村内の小学校(研究協力校より規模の大きな学校)とのテレビ会議システムを活用した交流授業が行われた。そこでの児童の姿を観察したところ、受け応えに時間がかかる等の課題はあるものの、学習したことを生かして相手校の友達と積極的に関わろうとする姿が見られ、学習の成果を見取ることができた。

以上①、②から、「自他の見方を広げる」取組、「自他にはたらきかける」取組に焦点化し、小規模校のよさと教育相談の手法を生かした実践を行ったことは、児童の他者と関わる力の向上の一助になったと考えられる。また、同規模校の児童がとらえている自校のよさについて、研究協力校の児童に紹介した際、「同じ小さな学校でがんばっている友達がいるので私もがんばりたい」等の感想が寄せられた。このことから、小規模校の児童の他者と関わる力を育てるためには、自校より規模の大きな学校との交流の場において、関わりやすい機会や対象等を広げるとともに、自校と同規模校との交流の場を設けて、同じ楽しみや悩みをもつ仲間との関わりから喜びや希望をもたせることも大切であることが推察された。

2 今後の課題

授業等の直後は、学んだ内容を生活の中に積極的に取り入れようとする姿が見られたが、時間の経過とともにその意識が薄らいでいく様子が見られた。そのため、今後は、学んだ内容や自分の行動を定期的に振り返る機会を設定するとともに、継続して児童同士が相互に学び合うことのできる場を設けていくことで、他者と関わる力の更なる伸長と定着に努めていきたい。